

法然と親鸞の人間観の相違

一 法然と親鸞の關係

法然と親鸞の思想はこれまで盛んに研究されてきた。それゆえに、彼らの思想の意義がどのようなものであったかについては、様々な見解が出されている。

例えば、彼らの思想が鎌倉時代における仏教の革新運動であったということはよく言われている。すなわち、形骸化し腐敗していた従来の仏教を否定し、改革したものととして法然と親鸞の思想はしばしば評価されている。あるいは、従来の仏教に存在していた思想の流れの展開として、法然と親鸞を理解するという場合もある。

ところで、こうした研究においては、法然が先駆者であり、親鸞がその完成者であるとする場合がしばしば見受けられる。法然と親鸞は師弟であるので、共通した思想の枠組みを持って

いる。その反面、二人の思想には相違する点も数多く存在する。そうした両者の關係が、先駆的で不徹底な思想と、完成して徹底した思想として解釈される傾向が存在するのである。

なぜ、このような傾向が存在するのだろうか。その理由の一つとして、法然思想が相反する二つの性格を持っているように見えるのに対して、¹⁾親鸞思想は矛盾する要素を持たない純粹なものに見える、ということが挙げられるだろう。そのために、法然の思想が未だに不徹底なものであったのに対して、親鸞はそれを徹底させたと論じられることが多いのではないだろうか。今回のテーマとなる人間観についても、同様のことが言えると思う。

齋藤真希

二 法然と親鸞の相違点

法然と親鸞は共に彼らの時代の人間を、末法という悪い時代

に生きる、劣った存在であると考えていた。法然と親鸞によるならば、こうした末法の人間は悪いものであるために、現世で修行して成仏することができない。しかし称名念仏によるならば、阿彌陀仏の助けによって極楽往生を遂げ、最終的に成仏することができる。したがって、末法の人間は称名念仏によって極楽往生を遂げねばならないという。

つまり、法然と親鸞は共通して、人間を末法の劣悪な存在であると考えている。そしてそのような人間の救いの方法として、念仏往生を主張していると言える。しかし、法然と親鸞を比較すると、彼らの人間に関する言説には、異なる点が存在している。こうした違いとして、よく挙げられるのは、次の三つのものであるだろう。

一つ目は、人間を徹底して悪いものとするか否かの違いである。法然は基本的に人間を末法の劣った存在としつつも、相対的に善いものとする場合がある。それに対して、親鸞は人間を徹底して悪いものとしか考えない。

二つ目は、自分が劣悪な存在であるという自覚が、極楽往生の条件であるか否かの違いである。法然は往生のために必ずしも悪の内省を必要としない。それに対して、親鸞は自身が悪いものであるという自覚を、往生のために必要とする。

三つ目は、善人と悪人のどちらが優先して往生するかの違いである。法然は念仏によるならば、善人も悪人も平等に往生すると説いている。それに対して、親鸞は善人ではなく悪人こそ

が往生を遂げるとする。

三 先行研究による解釈

以上のような相違点に基づいて、しばしば法然と親鸞は共に人間の悪を己の課題としていた。しかし、悪と取り組む姿勢は、法然よりも親鸞の方が徹底していた、という論がなされている。例えば、法然と親鸞は共に、人間の根源悪を問題にしていた。

しかし、法然に比べて親鸞はより徹底した段階にあった、という理解の仕方がある。このような考え方によると、人間を末法の衆生とみなすのは、人間を根源的に悪でしかない存在と考えることである。そして、このような人間の救済こそが、法然と親鸞の思想的な課題であったという。

ところで、法然は人間を相対的に善とする場合があるのに対し、親鸞は人間を徹底して悪いものと考えている。また法然が自己の悪の内省をそれほど重視しないのに対し、親鸞は自己の悪の内省を必要とする。

このような違いは、人間の根源悪に向き合う、法然と親鸞の態度の違いであったと解釈されている。すなわち、人間を徹底した悪と考え、悪の内省を要求する親鸞は、そうではない法然に比べて、より深く人間の根源悪とその救済に向き合っていたという評価がなされるのである。

あるいは、法然と親鸞は共に、権力者から悪とされ、貶められた民衆の解放を自己の課題とした。しかし、そうした課題の

探求において、法然よりも親鸞が徹底したものであったという理解の仕方もある⁽³⁾。このような考え方によれば、当時の権力者は自らを善人であると誇り、民衆に悪のレッテルを貼って、世俗的にも宗教的にも貶めていた。こうした中、法然と親鸞は念仏という、悪人が往生を遂げる道を選いたのである。このことは、抑圧された民衆に対して、宗教的な解放と平等を約束することであったという。

ところで、法然が善人と悪人の平等な往生を説くのに対して、親鸞は悪人こそが往生を遂げると主張する。こうした違いは、民衆の解放という課題に対する、両者の取り組みの違いを表している⁽⁴⁾と解釈される。すなわち、悪人こそが往生すると説く親鸞の方が、抑圧された民衆の解放を志す態度において、善人と平等を説くに過ぎない法然よりも、徹底したものがあつたと論じられるのである。

いづれにせよ、法然と親鸞は念仏による末法の衆生の往生を説くということによって、同一の主題を追求したとされている。その主題というものは、例えば人間の根源悪からの救済であつたり、抑圧された民衆の解放であつたりする。そして、そのような主題の探求において、法然は未だに不十分で矛盾する点を残したのに対し、親鸞は徹底していたと論じられている。このような両者の違いを反映するものとして、法然と親鸞の人間観の違いは理解されていると言えるだろう。

ところで、法然と親鸞の人間観について、これとは別の見方

をすることも可能ではないだろうか。法然と親鸞の人間に関する言説は、それぞれの思想のあり方に応じて、必然性をもって説かれているもののはずである。このように考えるなら、相互に異なつた両者の人間観を、同一の主題のもとに把握する必要は必ずしもないのではないか。以下、このような観点から、法然と親鸞の人間観を比較していく。

四 法然の思想

法然にとつて、末法の人間であることは、善をおこなうことが難しく、悪をおこなうことが盛んである状態を意味している。そして、このような人間に適した成仏の方法が、念仏による往生であるという。

もしも、現世で修行して成仏することを目指すなら、悪を止めて善をおこなわねばならない。つまり煩惱などをとどめて、様々な修行をおこなわねばならない。こうしたことは末法の人間には不可能である⁽⁵⁾。

しかし、念仏によつて往生するのであれば、必要なのは、ただ日々念仏を相続していくことのみである。この際に、どれほど悪業をおこなつても、往生を妨げることはない。またその逆に、どれほど善業をおこなつても、往生を遂げやすくなることはない⁽⁶⁾。こうしたことであれば、末法の人間でもおこなうことができる。

したがって、末法の人間は、現世における成仏を諦め、念仏

往生を志さねばならない。そのために、自分が末法の悪い人間であると自覚し、念仏こそが自分にふさわしい方法であると思ふことは必要であると言える。

しかし、自己の悪を自覚することは実は、往生の条件として絶対に必要なものではない。法然において、往生のために重視されるのは、自己の悪を自覚することよりも、むしろ自己の善悪に拘らないことである。

なぜならば、自己の善悪に拘りを持つ者は、念仏の実践ではなく、念仏以外の行業によって往生が決定するという、誤った考えを抱いている。そのために、念仏に専念することができず、往生することもできない。つまり、末法の人間が成仏するには、念仏の実践に専念することのみが重要である。そのために、自己の善悪を気にかけることがあつてはならないのである。

自己の善悪に拘るといふのは、例えば自分が戒律を破るなどの悪業をなしたために、念仏しても往生できないのではないかと、といった疑念を抱くことである。法然はこのような疑念を解消するために、五逆罪を作つた人間などについて言及している。

すなわち法然によれば、五逆罪という重罪を犯した者であっても、念仏すれば往生することができる。それならば、彼らほどの罪を犯していない者が、いかに罪を作つていようと、そのために念仏往生を疑ふ必要はないといふのである。

ここにおいて、法然は五逆罪を犯した人間とそうではない自分たちを比較し、自分たちを相対的に善なるものと捉えている。

こうした言説の目的は、念仏往生を志す者に、自己の善悪に拘る心を捨てさせることであると考えることができるだろう。

このような法然において、善人であることや、悪人であることは、究極的には全く意味を持たない事柄である。というのも、善人や悪人であるからといって、往生が遂げやすくなったり、遂げにくくなったりすることはない。必要なのはただ念仏を実践することのみである。したがって法然の立場では、念仏によるならば、善人も悪人も平等に往生すると言へる。

以上、法然思想について概説した。法然は自己の善悪、すなわち念仏以外の行業によって成仏を求めると、念仏に専念して往生を求めるとを対立させている。そして、念仏以外の行業には一切心をかけず、日々念仏を相續していくことを重視している。そして、このような法然思想のあり方に基づいて、現在の人間を相対的に善とすること、悪の自覚を往生のために必要としないうこと、善人と悪人の平等な往生を説くことなどが説かれていると言える。

五 親鸞の思想

このような法然に対し、親鸞の思想はどのようなものであるのだろうか。親鸞において、末法の人間であるといふことは、自己のなす一切の働きが、煩惱によって汚れた輪廻の業でしかないといふことを意味している。

このような人間は、成仏に向かうための善業を、全くおこな

うことができぬ。このような人間について、相対的にでも善であると論じることが不可能である。したがって、親鸞は人間を徹底して悪いものとするのである。¹⁰⁾

親鸞思想においては、こうした人間を救済するものとして、阿彌陀仏の他力が説かれている。阿彌陀仏の他力はどのような悪業にも妨げられることなく、あらゆる衆生を往生させる。したがって、末法の人間が成仏するには、自分のはからいや努力によらず、阿彌陀仏の他力によることが必要である。¹¹⁾

具体的には、自分が悪人であることを深く自覚して、自らはからいや努力を捨てると共に、阿彌陀仏を深く信じて、他方に頼るといふ態度が必要である。こうした態度は信心と呼ばれ、念仏と共に往生の要因として重視されている。

ちなみに、信心は悪人でしかない人間自身のはからいではなく、他力の働きによって生じる心とされている。そして、念仏はこうした信心に伴って、自ずからおこなわれるものであるといふ。つまり、親鸞において往生の過程は他力によってのみ実現するものである。そこに人間自身の働きは一切関わることはないのである。

悪人こそが救われるという言説も、こうした考え方に基づいて言われている。しばしば親鸞は、善人ではなく悪人こそが往生すると主張した、とされている。¹²⁾ところで、この主張において、善人とは自らのはからいや努力によって、成仏が可能であると誤解する人のことを指している。これに対して悪人とは、

自己のはからいや努力を止めて、他方に頼る人を意味している。したがって、善人ではなく悪人こそが救われるとは、自己の働きに執着する者ではなく、他方に頼る者こそが往生するということの意味している。

以上、親鸞思想について概説した。親鸞は人間自身の働きと他力を対立させる。そして、自己のはからいや努力を離れて、阿彌陀仏の他力によるという、内面的な態度の転換を重視している。こうした親鸞の思想のあり方に基づいて、人間を徹底して悪人とする、悪の自覚を往生のために必要とすること、善人ではなく悪人こそが往生することなどの言説は説きだされていると言えらう。

六 結論

法然と親鸞は現在の人間を末法の劣った存在とし、念仏による往生を求めるといふ点で一致している。しかし、共通した枠組みを持ちながらも、両者の思想にはかなり異なる点が存在している。

これまでの研究ではしばしば、法然と親鸞の思想は、同一の主題を追求したものととして把握されていた。同一の主題とは、例えば根源悪からの救済や、抑圧された民衆の解放といったことである。このような主題を追求する程度の違いを反映するものとして、法然と親鸞の相違点は理解されてきたと言える。しかし、法然と親鸞の思想を同一の主題のもとに把握する必要は、

必ずしもないのでないだろうか。

法然は念仏の實踐に専念することによって、往生を求めることを重視している。その際に、自己の善惡に拘泥し、念仏以外の行業によって往生や成仏を求める態度を、厳しく否定している。その一方で親鸞は、阿彌陀仏の他力を信じ頼ることで、往生を求めることを重視している。その際に、自分自身のはからいや努力によって、往生や成仏を求める態度を翻し捨てねばならないとする。

つまり、法然が念仏以外の行業を心にかけて、ただ念仏を實踐することを求めるのに対して、親鸞は自己のはからいや努力を離れ他力に頼るといふ、内面的な態度の轉換を要求している。以上のような法然と親鸞の關係とは、同一の主題を追求するもの同士というよりも、それぞれ焦点とするものが異なる思想であると理解できるのではないか。すなわち、法然と親鸞は共通した枠組みを用いつつも、互いに異なる事柄を追求したと言えるのではないだろうか。

法然と親鸞の間の相違点も、そのような両者の思想のあり方の違いに応じて、生じていると考えることができる。例えば、人間を徹底して悪とするか否か、往生のために悪の自覚を必要とするか否か、善人と悪人のどちらが優先して往生するか、という違いもまた、念仏の實踐を重視する法然と、内面的な態度の轉換を重視する親鸞の、思想のあり方の違いを反映していると考えることができるだろう。

(1) 石田瑞磨「法然における二つの性格」『日本仏教思想研究4』法藏館、一九八六年。

(2) 信樂峻磨「法然浄土教と親鸞浄土教」『親鸞と浄土教』法藏館、二〇〇四年。家永三郎「親鸞の思想の成立に関する思想史的考察」『家永三郎集2』岩波書店、一九九七年。

(3) 二葉憲香編「親鸞のひらいた歴史的地平」『親鸞のすべて』新人物往来社、一九八四年。

(4) 「煩惱具足してわろき身をもて、煩惱を断じ、さとりをあらはして成仏す」と心えて、昼夜にはげめども、无始より貪瞋具足の身なるがゆえに、なかく煩惱を断ずる事かたきなり。かく断じがたき无明煩惱を三毒具足の心にて断ぜんとする事、たとへば須弥を針にてくだし、大海を芥子のひさくにてくみつくさんがごとし。(大橋俊雄訳「念仏往生要義抄」『法然全集3』春秋社、一九八九年、二二三頁)。

(5) 念仏を實踐する具体的なやり方として、法然は相統ということを非常に重視している。相統とは、念仏を絶え間なく称え続けることである。

問。日別ノ念仏ノ数返ハ、相統ニイルホドハ、イカマハカラヒ候ベキ。

答。普導ノ釈ニヨラバ、一万已上ハ相統ニテアルベシ。タゞシ一万返ヲイソギ申テ、サテソノ日ヲスゴサム事ハアルベカラズ、一万返ナリトモ、一日一夜ノ所作トスベシ。惣ジテハ一食ノアヒダニ三度バカリトナエムハ、ヨキ相統ニテアルベシ。(大橋俊雄訳「十一箇条問答」『法然全集3』一七四頁)

という問答によれば、一日一万回以上の念仏を称えるなら、相統と呼ぶことができる。ただし、一万回であっても短時間で一気に称えるのではなく、一日一夜かけて称えねばならない。一食の間に三度ほど称えるのが、よい相統であるという。

(6) 「およそ阿彌陀仏の本願と申す事は、やうもなくわが心をすませともあらず、不浄の身をきよめよとにもあらず、ただねてもさめても、ひとすちに御名をとなふる人をば、臨終にはかならずきたり

てむかへ給ふなるものといふ心に住して申せば、一期のおほりには、仏の来迎にあづからん事うたがひあるべからず」(前掲「念仏往生要義抄」『法然全集3』二一六—二一七頁)。

(7) 「心の善悪をもちへり見ず、つみの軽重をも抄汰せず、ただ口に南無阿彌陀仏と申せば、仏のちかひによりて、かならず往生するぞと決定の心をおこすべき也」(大橋俊雄訳「浄土宗略抄」『法然全集3』一八六頁)。

(8) 「三宝滅尽ノ時ナリトイエドモ、一念スレバナホ往生ス。五逆深重ノ人ナリトイエドモ、十念スレバ往生ス。イカニイハムヤ三宝ノ世ニムマレテ、五逆ヲツクラザルワレラ、弥陀ノ名ヲトナヘムニ、往生ウタガフベカラズ」(大橋俊雄訳「大胡の太郎実秀の妻室のもとへつかわす御返事」『法然全集3』二〇—二二頁)。

(9) 「男女・貴賤をえらばず、善人・悪人をもわかつたず、心をいたして弥陀を念ずるに、むまれずといふ事なし」(大橋俊雄訳「十二箇条の問答」『法然全集3』二二四頁)。

(10) 「ほかに賢善精進の相を現ずることをえざれ、うちに虚假をいだければなり。貪瞋邪偽奸詐百端にして悪性やめがたく、事地處におなじ。三業をおこすといへども、なづけて難澁の善とす、また虚假の行となづく、眞實の業となづけざるなり」(金子大栄校訂「教行信証」岩波書店、一九五七年、一三五頁)。

(11) 「一切衆生の身口意業の所修の解行、かならず眞實心のうちになしたまひしをもちあんことをあかさんとおもふ」(前掲「教行信証」一三五頁)。

(12) 「二つには決定してふかく自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねに没しつねに流轉して出離の縁あることなしと信ず。二には決定してふかくかの阿彌陀佛の四十八願は、衆生を攝受してうたがひなくおもんばかりなれば、かの願力に乗じてさだめて往生をうと信ず」(前掲「教行信証」一三七頁)。

(13) 「善人なほもつて往生を遂ぐ、いはんや悪人をや。しかるを世の人つねに曰く、「悪人なほ往生す、いかにいはんや善人をや」と」(柏

原祐義編「歎異抄」『真宗聖典』法藏館、一九三五年、六六七頁)。いわゆる悪人正機は、「歎異抄」という親鸞の弟子の著作にのみ存在する言説であるが、多くの研究に取り上げられており、親鸞自身の思想とも決定的な差異は存在しないと考えられるので、本発表でも親鸞の思想として取り上げる。

(さいとう・まき、日本倫理想史、お茶の水女子大学非常勤講師)